

公正研究

白倉 治郎

名古屋大学理学研究科構造生物学研究センター



昨今「公正研究を」が話題となっている。科学研究は元来 fair (公正) であるはずなので、根幹を揺るがす問題である。そこで、なぜ研究が歪められるのかを考えてみた。不正研究の事例「データ又は実験結果の偽造、データ若しくは研究成果を変え、若しくは省略することにより研究内容を正しく表現しないことなど」は、むしろ論外であり、人格の問題でもある。実際にはアイデアや方法の盗用、故意による対照実験の省略など不正とは分かりにくい微妙な問題が垣間見える。そのいくつかは、研究資金の獲得や上級職に就くための競争が遠因と思われる。研究費を得るためには、研究能力を示す研究論文が相当数なければならないが、生命科学では単純な数ではなく、インパクトファクターの高低が絡んでくる。著名な科学雑誌に多数の論文を載せた人が多くの子算を獲得し、上級の地位も占めることになる。正当な競争であれば何も悪いことではない。著名な雑誌に掲載された研究が全て優れているわけではないが、優れた研究が多いことも事実である。有名な雑誌の中には、新規性ととも、ストーリー性を重視している所もある。多くの正確なデータこそが科学論文の基盤であるはずが、より魅力的なストーリーを作ろうとデータの取捨選択を誤ることもある。また、早く実験の区切りを付け、次のステップに進みたいと思うのも常である。データ量が不十分であるにもかかわらず、期待するストーリーにあったデータのみを採用してしまうことも考えられる。例えば、標的タンパク質の局在に関し、光学顕微鏡(光顕)と電子顕微鏡(電顕)で観察結果が一致しないことがよくある。どちらかの結果のみでストーリーを作り、なぜ電顕と光顕で結果が異なるのか、手法に未熟性はないのかなどを検討し、慎重に再実験を繰り返すことはしない。実は問題なのは、このように進められた実験データの全てが間違いではなく、真実も含まれているため、第三者による検証には膨大な時間を要することである。実験を行った本人は何が間違いであるかがわかるはずであり、やはり一番早く真実に到達できる位置にいますので、間違いを訂正し、真実を述べる勇気を持つべきである。科学は国際性が高いため、国際的な信用度にも関わる。

一方、論文化を急ぐことでデータの蓄積が不十分になり、

同一データの使い回しにつながる。総説では、引用を明記すればオリジナル論文にある写真を流用しても問題ないが、別のオリジナルの論文に使用するのは不適切である。実際、論文の review において、そのような例に2回ほど遭遇した。これらは冒頭述べたような明らかな不正研究の範疇に入っていないかもしれないが、不愉快である。不愉快ついでにもう一つ、実は研究者の不正行為は自身の研究過程よりも、投稿論文の review やグラントの審査において第三者によるアイデアの盗用などが最も多いと思われる。実際、米国では競争状態の研究は論文を投稿してから、学会発表するのが普通になっている。また研究計画が詳細に書かれている ROI などの研究費の申請書の審査は(私が留学時に知った範囲では) study section ごとに集会し、審査員相互が顔を合わせて合議審査する。このため、審査過程でのアイデアの盗用は他人にわかってしまうので、防止策になっている。日本では、1段審査においては誰がどの申請書を審査したのか、わからないので、審査過程での盗用や漏洩は紳士協定で守られていることになる。

一方、著名な雑誌への採択率をあげるため、実験で足りない部分は英語の表現力、いわゆる書き方ということになる。論文の Editing を専門会社に依頼し、文法のみならず表現を磨き上げる時代である。Editing の会社も、どの雑誌に採択されたかを宣伝に使うほどになっている。Editing の会社を使うのは良くないというのではない。苦勞して得たデータを 100% 生かすためにはむしろ積極的に利用すべきである。英語の表現力でデータの不足を補うのではなく、あくまでも苦勞して得られた結論を多くの人に理解してもらうために Editing 会社を利用したい。

オリンピックの誘致合戦が激しくなると、そのプレゼンにはプロの演出家の力を借りることになる。残念ながら科学の世界も同じ道を辿っているように見える。ある会社が GCOE のための聞き取り調査に来たことがあり、その時、申請の手伝いをしているという大学数を聞き驚かされた。スポーツ選手も芸能プロダクションに所属する時代であるので、その内、大型研究を申請する人、教授に早くなりたい方は当社に登録をとったことにならないよう祈るばかりである。プロジェクトの採択や研究者の人事がプロダクション会社の演出により、左右されることにでもなれば、公正研究どころか、科学研究そのものが脅かされることになるだろう。

白倉 治郎 (Jiro Usukura)

略歴

1981年 東京大学大学院医学研究科修了 医学博士

1981年 東京大学助手 (医学部)

1984~1986年 米国 UCLA Jules Stein Eye Institute にて Visiting Scholar

1988年 名古屋大学助教授 (医学部)

2005年 名古屋大学教授 (先端技術共同研究センター) 工学研究科併任

2012年 名古屋大学定年退職 (名誉教授) 特任教授

現在、JST 先端計測分析技術・機器開発プログラム「Cryo-in lens S(T) EM 開発プロジェクト」リーダーとして名古屋大学勤務 (理学研究科構造生物学研究センター) Web: <http://str.bio.nagoya-u.ac.jp>